

## P-A・タギエフ『フランス人種主義理論』

松尾, 剛

<https://doi.org/10.15017/10036>

---

出版情報 : Stella. 19, pp.169-172, 2000-09-05. 九州大学フランス語フランス文学研究会  
バージョン : published  
権利関係 :



## P-A・タギエフ『フランス人種主義理論』

松 尾 剛

本書は千一夜出版社「レ・プチ・リーブル Les Petits Libres」叢書の一冊として1998年に出版された<sup>1)</sup>。同シリーズは惹句によれば「待ち時間や旅の道中や眠れぬ夜のために優れた著作を提供しよう」と企画されたもので、本のサイズは目的に合わせてじつに小さい(15×10.5 ㍍)。また気軽に購入できるようにという配慮からか、10-20フランと価格も抑えられている。まさしく退屈なとき、ふと手にとるにふさわしい叢書といえよう。しかし本書にかぎっていえば、これはけっして暇つぶしとして読まれるべきものではない。それどころか、人種主義に関心をもつ者にとって必携といえる著作なのである。さらにいえば同書は、そのマテリアルな側面が想像させるようなフランス人種主義への入門書でさえない。以下に述べるように、著者の積み上げてきた学問的成果と本書執筆のための文献学的調査に支えられた本格的な研究書なのである。

CNRSの研究者であり、政治学学院やブリュッセル自由大学で教鞭をとる著者ピエール＝アンドレ・タギエフは一貫して人種主義・反ユダヤ主義の問題を追求してきた。著作は数多いが、とりわけ本書の前年に出版された『人種主義』は彼の長年の研究をコンパクトにまとめた好著といえる<sup>2)</sup>。そこでまず、これをもとに人種主義にかんするタギエフの見解を要約し、その後『フランス人種主義理論』の内容を見てみよう。

彼の人種主義に対する基本的なスタンスは、これを自民族中心主義に還元しない、ということにある。言いかえればタギエフは人種主義を、人類に普遍的な現象ではなく、西洋の近代化にともなって現れた、きわめて特殊な思潮として理解するのである——「人種主義とは歴史的現象なのであり、その発生は近代黎明期のヨーロッパにあるのだ」。具体的には彼は3つの歴史的事実を人種主義のアーキタイプとして指摘する。まず15世紀から16世紀にかけてイベリア半島に現れ、ユダヤ教徒をユダヤ人化することを目指した「血」の概念。次

いで、植民地支配を正当化するに16-17世紀に流布された黒人差別。最後に、フランスは2種の異なる種族——征服者にして貴族であるフランク族と敗北者であり平民のゴール族——からなり、両者間の婚姻は許されないとするフランスの伝統的貴族主義。これらはいずれも純血概念を中核に置き、〈劣等種族の血〉はかならず〈優秀な種族〉に破壊的な結果をもたらすと考える。タギエフによれば、この純血への意志と交雑への恐怖こそが後の人種主義の根幹を形成する。つまり血という不可視の要素にかわって可視的な肌の色がクローズアップされ、本来的には種族・一族を意味した単語 race が近代的な意味での人種を意味するものへと変貌していったとき、「世界像・歴史の形而上学・政治的イデオロギー、つまり人種主義理論」が誕生したのだ（本書の原題『血と肌の色』はこれに由来する）。よって人種主義とは人類普遍の現象などではなく、西洋史にその発生源を特定しうる潮流であると著者は主張するのである。

本稿が対象とする『フランス人種主義理論』は、以上の観点を前提としたうえで、実際にフランスに現れた人種主義を3つのタイプに分類し、それぞれの代表的理論家たちを詳細に検討する。まず最初に、かつて人種は純粹であったが不可避免的に混血が進み、人類は救いようのないほどに退廃した、人間の歴史とはデカダンスに他ならないとする思想。これを代表するのが『人種不平等論』のアルチュール・ド・ゴビノーである。タギエフによれば、人種の混血とそれにともなう人類の退廃を主張するゴビノーの人種理論は、いかなる意味でも救済をもたらさない、きわめてペシミスティックなものである。つまりゴビノーの特徴は非政治性にあるとあってよい。よって『人種不平等論』の思想それ自体は20世紀の人種主義政策に結びつくものではないと著者は捉える。

第2タイプの人種主義によれば、遺伝的に異なった性質をもった人種たちは生存をめぐる戦う運命にあり、もっとも進化した存在だけが生き残ることができる。一見して分かるように、これは社会ダーウィニズムと呼ばれる理論だが、そのフランスにおける旗手がギュスターヴ・ル・ボンである。本邦においては『群集心理』とともにナチズムの先駆者として悪名高いル・ボンであるが、彼は〈心理学〉以外の領域にも手を染めており、わけても人類学が初期作品において大きな比重を占めていることは意外に知られていない。インドやエジプトの文明を観察した彼は、人類の起源は複数であり、相異なる文明を築いた人間は異なった人種に所属すると確信するようになる。畢竟歴史とはル・ボ

ンにとって人種闘争史なのだ。よって彼の目には戦争や、植民地主義に具現された支配と抑圧は自然法則に適ったものとして映る。必然的にその主張は、あらゆる他の社会ダーウィニズム同様、経済活動とその結果にたいする国家の介入を拒否する資本主義社会のイデオロギーとして機能せざるをえない。タギエフによれば、この明白な政治性こそがル・ボンとゴビノーを決定的に隔てるものなのである。

第3の人種主義は優生学的である。このタイプの主張をおこなう人々にとって、人種とは原初に存在したが今や失われたものではなく、あるいは独自の文明を築き生存をかけて他の集団と争っているものでもなく、現在の不純な人間をかぎりなく純粋にすることで作り出されるべき目標なのだ。一言でいえば、優生学的人種主義者にとって人種とは過去でも現在でもなく、未来に存在するのである。これを体現するのがセリーヌやヴァレリーに影響を与えたといわれる〈人類学者〉ジョルジュ・ヴァシェ・ド・ラプージュだ。ラプージュもまたル・ボンと同じく人種間には生存競争があるとす。しかし彼はル・ボンとは異なり、優れた人種がこの戦いに勝つとは考えない。彼によれば、むしろ人間社会における生存競争は〈劣等人種〉にこそ有利に働き、かえって〈優秀な人種〉こそが淘汰されてしまうという。つまり人間の博愛や福祉が本来なら過酷な環境のなかで淘汰されるべき人種を存続させてしまい、しかも彼らの遺伝要素が優秀な人間の血を汚してゆく、そうラプージュは考えたのである。彼はこれを自然淘汰ならぬ「社会淘汰」と呼ぶ。このさかしまの淘汰を避け人類の退化を防ぐために、彼は「計画的淘汰」を提唱する。人種の生活圏を峻別し、幾世代にわたり優れた人間同士を交配させつづけ、完璧なまでに美しい人種アーリア人を生み出さねばならない、そう彼は主張するのだ。まさしくラプージュの主張は優生学的人種主義の典型であり、ここにおいてナチスの人種政策に直接的に連なる理論が誕生したのである……。

以上がタギエフの主張の要約であるが、本書の意義はなにより、名のみ高くしかしほとんど読まれることのなかった思想家たちの言説をとりあげ詳細に検討した点にある。ゴビノーの『人種不平等論』がプレイアド版著作集に収められたとはいえ、この大著を精読、いや通読した人がどれほどいるだろうか。また『群集心理』以外の、たとえば「脳のさまざまな容積の法則とその知性との関係をめぐる解剖学的数学的研究」や「文明史におけるユダヤ人の役割」を

執筆した〈人類学者〉としてのル・ボンを知る人はけっして多くはあるまい。ラブージュにいたっては、本書を手にした読者の大半にとって未知の存在であるにちがいない。たとえ知っていたとしても、それはあからさまなアーリア至上主義を歌いあげた〈伝説的人物〉としてのみであり、この自称人類学者の著作に触れたことのある者はほとんどいないはずだ。彼ら3人の理論を一貫した展望のもとに総括し、研究書としてきわめて高い水準を保ちながら、それを一般読者向けにコンパクトにまとめたタギエフの功績は大きい。書評者が本書をとりあげた所以である<sup>3)</sup>。

## 註

- 1) Pierre-André TAGUIEFF, *La couleur et le sang. Doctrines racistes à la française*, Paris: Éd. Mille et une nuits, coll. «Les Petits Livres», 1998.
- 2) Pierre-André TAGUIEFF, *Le racisme*, Paris: Flammarion, coll. «Dominos», 1997.
- 3) 最後に注記のかたちではあるが、本書に対して感じた違和感をひとつ述べておきたい。それはゴビノーのユダヤ人観にかんするものである。タギエフはゴビノーがユダヤ人に対しては好意的な仕方ではか語っておらず、それゆえ彼を反ユダヤ主義者として規定するのは誤りであるとする(28-31頁)。しかしことはそれほど単純ではあるまい。ゴビノーは人類の最上位に置いた〈白人種〉をさらに細分化し、そのなかでもアーリア人をもっとも優れた存在としている。つまりアーリア人こそが人類の頂点に立つ存在とされたのである。このアーリア主義はたしかにタギエフの言うように、反ユダヤ主義と一対をなしているわけではない。ゴビノーは、知性と商才に長けた人種としてユダヤ人に敬意を払っているのだから。だが人類を白人種・黄人種・黒人種に分割したのち、さらに白人種をアーリア人やユダヤ人に区分し、とりあえずユダヤ人を白人種のひとつとして賞賛しながら、しかしそれゆえにこそアーリア人にとってもっとも危険な敵であるとする論法は、19世紀人種主義の典型ではなかったか。じじつヴァシェ・ド・ラブージュもその初期においては白人種としてのユダヤ人を賞賛しながら、のちには「現時点におけるアーリア人唯一の危険な敵、それはユダヤ人である」と断言するにいたるのである。とするならば、いかにゴビノーがユダヤ人に対して好意的な叙述をしようとも、それもまた反ユダヤ主義の伝統に棹差すものでしかなかったと考えるべきなのではないか。なぜなら支配人種としてのアーリア人への賞賛は、他の人種を被支配者として指定することなしにはありえないのだから。